



Title	言語へのバフチンの基本的視線
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2013, 17, p. 51-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50677
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語へのバフチンの基本的視線

西口 光一*

要 旨

バフチンによると、人と人の間で交わされる記号の客観的現実は、社会的交通に埋め込まれており、社会的交通はさらに社会の経済的組織の上に構築されている。われわれは、社会の経済的組織の上で記号あるいは言語を随伴させながら社会的交通を営んでいる。そして、そこにイデオロギー的現実すなわちわれわれの現実を（再）生産している。記号は、この交通が物象化された結果である。われわれがその中で生きているイデオロギー的現実というのを社会的交通の上に架けられた天蓋のようなものであり、われわれは互いの人間としての存在を相互に承認し合いながらイデオロギー的現実という天蓋における時々刻々の社会的出来事を構成しそれに関与しているのである。このようなバフチンの言語への基本的な視線をあらかじめ知ることで、われわれはよりよくバフチンの言語観を把握することができる。

【キーワード】バフチン、ソシュール、イデオロギー的記号、社会的交通、言語的交通

1 はじめに

バフチンの言語観は、われわれが一般人としてあるいは言語教育者として慣れ親しんでいる言語観とは大きく異なるものである。そもそも言語への視線が異なるのである。それゆえに、バフチンの言語観を理解するためには、バフチンの言語論について基本的な視線を知っておく必要がある。本稿では、そのような趣旨で、バフチンの言語についての基本的な視線に焦点を当てて論じる。

2 イデオロギー現象と記号あるいは言葉

2-1 社会的交通とイデオロギー

われわれが慣れ親しんでいる言語観は、ソシュール流の言語観であると言つてよい。ソシュール流の言語観では、言語を抽象的な記号の体系と見る。また、バフチンも指摘しているように、ソシュール流の言語観

では、言語を、直接何ものにも媒介されずに実在しているつまり直接客観的に実在しているかのように論じる傾向がある（バフチン, 1980, p.138）。そのようなものをソシュールはラングと呼び、バフチンは、その見方の特徴に注目して、規範として自己同一的な諸形態の体系（system of normatively identical forms）と呼んでいる。そして、そうしたものは主体が実際に言語活動に従事するときに関与しているものではなく、「反省がうみ出した所産」であると指摘して、自身の言語に関する関心はそこにはないことを示している¹。

語る主体の意識は、規範として自己同一的な諸形態の体系という形で、言語を操作するわけではありません。言語がそのような体系として存在するようになるのは、あくまで抽象化という操作を加えた後です。一定の認識・一定の実用〔外国語として教える、など〕を目的として相当の知的操

* 大阪大学国際教育交流センター教授

作を加えた後にはじめて得られるものです。言語の体系なるものは、言語に対する反省がうみ出した所産です。…彼にとって重要なのは、ある言語形態が所与の具体的な脈絡〔状況の脈絡と言語化された脈絡〕のなかに登場することを許容するような側面です。所与の具体的な状況の中で言語形態が〔状況に〕ふさわしい記号となりうる側面です。(バフチン, 1980, pp.140-141)

では、バフチンが関心を寄せている言語とは何か。われわれ人間の生き方の生産と再生産に言語が関わっていることは誰も否定しないだろう。こうした事情は、われわれが学問、芸術、道徳、宗教、政治などの活動に従事する場合でも、日常生活を営む場合でも、同様である。そのような事情についてバフチンは次のように論じている。

言葉〔発話〕は、人が協力して労働する場面にも、イデオロギー〔記号〕によるコミュニケーションの場面にも、偶発的な日常の触れ合いの場面にも、政治的な相互作用の場合などにも、ともかく人と人が相互に働きかけ、相互に接触しあうすべての場面に入りこんでおります。社会的なコミュニケーションの全域を貫いているイデオロギーの無数の糸が、言葉によって実体を与えられているといえます。(バフチン, 1980, pp.36-37)

バフチンは、学問、芸術、道徳、宗教、政治などの文化的な現象をイデオロギー現象あるいはイデオロギー活動（ロシア語では *ideologiya*）と呼んでいる。上の引用で「イデオロギーによるコミュニケーション」と言っているのは、こうしたイデオロギー作品を産出（創造）したり受容（鑑賞）したりするイデオロギー活動への従事を指している。また、こうしたイデオロギー現象とは別途に、日常生活での経験及びそれと直接に結びついた外的表現との総和をバフチンは日常イデオロギーとして措定している（バフチン, 1980, p. 199）。そして両者を含めて、言葉（発話）は人と人が相互に働きかけ相互に接触しあうすべての場面に入

りこんでいると論じているのである。そして、そのような活動をバフチンは社会的交通（上の引用では「社会的なコミュニケーション」）と呼び、どのような社会的交通にもイデオロギーの糸が貫いており、そのイデオロギーの糸は言葉によって実体を与えられていると論じているのである²。

2-2 交通という用語について

上の引用での「社会的（な）コミュニケーション」はロシア語原典では“*sotsialnoe obschenie*”である。“*obschenie*”は、引用内にもあるように、「人と人が相互に働きかけ相互に接触し合うこと」を意味する。この語は、バフチン（1980）のもう一つの邦訳である桑野訳（1989）をはじめとしてバフチンの著作の邦訳では「交通」と訳されることが多い³。“*ideologicheskoe obschenie*”や“*rechevoe obschenie*”も同じく「イデオロギー的交通」や「言語的交通」と訳されることが多い。

本稿で参照している北岡訳では、これらの“*obschenie*”に対して、「交通」という訳語は使わず、「コミュニケーション」という訳を充てている。しかし、“*obschenie*”は「人と人が相互に働きかけ相互に接触しあうこと」という意味であり、「コミュニケーション」という語で第一義的に伝わってしまう「何かを伝える」という意味よりもむしろ「いっしょに何かをする」という面が強調されている。そこで本研究では、「コミュニケーション」という語を使用したときに伴うそのような意味を避けて、“*obschenie*”の原義を込めて、桑野訳などで使用されている「交通」という用語を使用することとした。以降では、北岡訳で「社会的（な）コミュニケーション」、「言語コミュニケーション」、「イデオロギー的コミュニケーション」となっている部分はそれぞれ「社会的交通」、「言語的交通」、「イデオロギー的交通」として本文では論じることとなるので、その点に注意してほしい⁴。

2-3 社会的交通とイデオロギー記号

Holquist (1990) は、バフチンの思想⁵を「プラグマティズム的傾向をもつ知識理論」あるいは「人間の

言語の使用方法から人間行動を把握しようとする現代の認識論のひとつ」であると説明している (Holquist, 1990, p.15、邦訳 p.22)。その意味するところを筆者なりに言い換えると、バフチンの思想は、文化あるいはバフチンの言葉ではイデオロギー現象またはイデオロギー現象の現実の生産と再生産を言語を軸として捉え直そうとする知識理論あるいは認識論であり、バフチンの行った仕事はそうした認識論に基づく文芸理論の構築である⁶。そして、その思想的営みの中心」としてドストエフスキイ論やラブレー論を開拓しているのである。さらに、バフチンの思想の射程は人間学一般に及んでいることも付け加えなければならない (Clark and Holquist, 1984, pp.3-4、邦訳 p.18)。

以下の引用では、イデオロギー現象と言語現象の関係についてのバフチンの基本的な視座が明確に提示されている。

イデオロギー現象の現実〔文化〕とは、社会的な記号の客観的現実です。さらにいえば、この現実〔文化〕の法則は、記号によるコミュニケーションの法則でもあります。コミュニケーションの法則は、さらに社会=経済的な諸法則の総体によって、直接に規定されています。…イデオロギー現象とその法則とは、社会的なコミュニケーションの諸条件・社会的なコミュニケーションの諸形態にしっかりと結びついているものだと考えました。記号の現実の在り方は、この社会的なコミュニケーションによって余すところなく規定されております。なぜなら、記号という存在は、このコミュニケーションが物象化された結果にほかならないからです。(バフチン, 1980, pp.22-23)

つまり、バフチンは、社会的な記号の客観的現実つまり人と人の間で交わされる記号の客観的現実は、社会的交通に埋め込まれており、社会的交通はさらに社会の経済的組織の上に構築されるという関係にあり、イデオロギー現象の現実はそうした記号の客観的現実と相即的な関係にあると見る。すなわち、われわれは、

社会の経済的組織の上で記号あるいは言葉を随伴せながら社会的交通を営んで、そこにイデオロギー的現実すなわちわれわれにとっての現実を生産し再生産しているというわけである。記号という存在が「コミュニケーションが物象化された結果にほかならない」というのは、一つ前の引用中の「(イデオロギーの糸は)言葉によって実体を与えられている」と同じ趣旨で、人々によるイデオロギー記号の実践は、社会の経済的組織の上で展開される特定の社会的交通においてまさにそれとして行われるということである。そのような事情は、以下の引用でも説明されている。

周知のとおり、すべての記号〔テクスト〕は社会的に組織された人々が相互に働きかけあう過程〔コミュニケーション〕の中で組み立てられるものです。従って、記号の形態は何よりもまず、所与の人々が社会的にどう組織されているか、とりわけ人々が相互にどうコミュニケーションを行っているか、という点に関する直接の諸条件によって、規定されるものです。従って、社会の組織が変わり、コミュニケーションの直接の諸条件が変わるならば、記号も変わります。(バフチン, 1980, p.42、強調は原著、以降バフチンの著作においては同様)

ここでの「コミュニケーション」もいざれも前項で説明した“obschenie”となっていることに注意してほしい。この一節と先の2つの引用を照らし合わせて注意深く読むと、バフチンは、社会的交通を社会の経済的組織と記号あるいは言語の交通の中間項として設定しているのであるが、その社会的交通の条件がイデオロギー現象の現実を規定するとは言っていないことがわかる。そのような見方では、既定の社会的交通の現実という文脈があらかじめ成立して、その条件が発話の内容と形態を規定するという悪しき文脈主義となってしまう。バフチンは、社会の経済的組織と社会的交通と記号あるいは言語の交通という3者の物質的で客観的な連関構造が実践の具体性としてあって、その連関の中にある記号あるいは言葉の客観的現

実が現下のイデオロギー的現実を構成するというふうに説明しているのである。

そうしたバフチンの見解はイデオロギー的交通における記号の形態とテーマに関して論じている以下の議論でも明快に表明されている。

イデオロギー記号のテーマとイデオロギー記号の形態とは、相互に分かちがたく結び合っています。もちろん、抽象することによってはじめて、分離できるものです。なぜなら、結局のところ、同一の力、同一の物理的な前提が、イデオロギー記号のテーマをも、その形態をも、生み出しているからです。事実、全く同一の経済的諸条件が、現実の新たな要素を社会的視野のうちに加え、それを社会的に意味づけ、<興味あるもの>になると同時に、これと全く同じ条件=力が、イデオロギー的コミュニケーションの様態（認識、芸術、宗教、などの形態）を創り出し、これらのコミュニケーションの様態が、記号による表現の形態を規定しているからです。このように、イデオロギー作品〔記号のテクスト〕のテーマと形態とは、同じ搖籃の中で育ち、本質的には、同一のものの二つの側面です。（バフチン、1980、p.46）

バフチンによると、記号の形態とテーマ（意味）は、同じ「社会の経済的組織の上で行われる社会的交通」という搖籃の中で育った、本質的に同一のものの二つの側面となるのである。

ちなみに、バフチンの議論で社会の経済的組織と言われているものは、言うまでもなく、マルクスの言う下部構造のことである。ただし、社会の経済的組織と言っても、いわゆる経済や産業の組織だけを指しているのではない。それは、われわれが現実に生きている生活活動すべてを含んだ、組織された社会歴史的な生活・生存基盤全体を指している⁷。

2-4 言葉は卓越したイデオロギー記号である

上の引用すでに示唆されているように、バフチンは、さまざまな記号の中でも言葉はイデオロギー記号

として卓越したものだと捉えている。バフチンは言う。

記号のこうした特性、いいかえると、記号の在り方が社会的なコミュニケーションによって余すところなく全面的に規定されているという特性が、最も明瞭に、この上なく完璧な形で現れているのは、言葉の場合です。言葉はすぐれてイデオロギー的な現象です。言葉の現実の在り方には、それが記号として働くという機能によって、余すところなく決定されております。言葉の裡にはこの機能に関与しないもの、この機能から生ぜず、この機能により形成されないものは、何ひとつありません。言葉は、社会的なコミュニケーションの最も純粋で最も精密な媒体です。（バフチン、1980、p.23）

ゆえに、言葉はイデオロギーに関する学の第一の研究対象となるとバフチンは主張している（バフチン、1980、p.28）。このようにバフチンが関心を寄せてているのは、イデオロギー現象としての言語現象、あるいは、卓越したイデオロギー記号としての言葉=発話なのである⁸。

ところで、バフチンの記号という用語の使い方には注意が必要である。われわれは、文と発話の違いを知っている。前者は抽象的に捕捉された言語の一単位であり、後者は具体的な言語行使の一単位である。言うまでもなく、バフチンの関心は発話にある。バフチンの用語を注意深く見てみると、文ではなく発話に対応するもの、つまり抽象的な記号ではなく具体的に行使されたものをイデオロギー記号あるいは単に記号と呼んでいる。われわれが普通に記号と呼んでいるものはバフチンにおいては、イデオロギー記号と区別して、信号となる。言語や言語的交通（一般的な用語ではコミュニケーションと呼ぶほかない）を論じる場合に文や信号（一般的な用語では記号）のことを考えてしまいがちな一般的な発想に反して、バフチンは徹頭徹尾具体的に行使される発話やイデオロギー記号に関心を置いているのである。

3 イデオロギー現象としての言語現象

3-1 発話は出来事である

イデオロギー現象としての言語現象ということについてバフチンは改めて次のように論じている。

分節されていない動物的な叫びだけは、個体の生理的な装置の内側で組織されます。動物的な叫びのうちには、生理的な反応に関して、いかなるイデオロギー的な付加もありません。しかし、個々の主体によって産出される、もっとも素朴な人間的な発話も、その内容、その意味と意義の点からみると、[生体の] 外で組織されているものであり、社会的状況の非生体的な条件の下で組織されているものです。発話は、その下で組織されているものです。発話は、それ自体、隅々まで社会的な相互作用〔コミュニケーション〕の所産です。発話行為が行われる状況によって規定される、最も卑近な相互作用の所産であるだけではなく、当の発話行為が行われる共同体・集団の諸条件の総和によって規定される最も遠く最も広く及ぶ相互作用の所産でもあります。(バフチン, 1980, p.205)

前節での引用の場合と同じようにここでも言語=発話は社会的交通の所産であると論じられている。つまり、ある時・ある場所で発話が行われるとき、それは話し手にとっても聞き手にとっても生体の反応ではなく(ゆえにそのように受け取られるのではなく)、そこにイデオロギー的現実が起こっていることを見出すのである。そして、相手から発話の行為が自身に向かられるときには、それに応答するのである。バフチンにとって、言語現象は、「ひとつの発話と多くの発話とによって行われる、言語による社会的相互作用〔コミュニケーション〕という、社会的な出来事〔共起・共存〕」(バフチン, 1980, p.208) なのである。

さらにバフチンは、こうした記号について「このイデオロギー〔記号〕の産出〔発信〕と解読〔受信〕との連鎖〔コミュニケーション〕は、記号から記号に至

り、さらに新しい記号へと進んでゆく、切れ目なく一貫して続く一本の鎖」(バフチン, 1980, p.17) であるという観察を述べ、その鎖の一つの環である発話は、誰の発話であるかという面と誰に向けられた発話であるかという面という2つの面を持った行為であり、それは発話の当事者と聞き手の間に架けられた橋であると譬えている⁹ (バフチン, 1980, p.188)。発話が出来事であるということと、発話の連鎖が切れ目なく続くというのは、社会的交通において、話順の交替によって入れ替わる「わたし」と「あなた」は共同的かつ相互的にイデオロギー的現実の構築に従事するということである。

われわれがその中で生きているイデオロギー的現実というのは、社会的交通の上に架けられた天蓋のようなものである。社会的交通は、社会の経済的組織の特定の場所と時間で生身の身体を持った人々によって営まれる。われわれはそのような物質的な世界にあって身体を操作して共同的に活動しながら同時に声を出し合っている。そのように振る舞うことで、互いの人間としての存在を相互に承認し合いながら、イデオロギー的現実という天蓋における特定の社会的出来事を構成しそれに関与しているのである。そして、そのような社会的出来事の中で個々の発話は「『他者』との関係の中にある『人間』を表」すことになる(バフチン, 1980, p.188)。個々の発話は「話し手と聞き手とが共有する共通の領域」(バフチン, 1980, p.188) となって、相互的に時々刻々のイデオロギー的現実を織り成していくのである。

3-2 言語研究について

言語に対してこのような視線を向けるバフチンは、言語研究そのものについてどのように考えているのであろうか。バフチン(1980)の第2部第3章において、言語研究の手順についてまとめようとする直前の部分でバフチンはそこまでの議論を再度確認して次のように論じている。

言語コミュニケーション〔とその中で送受される通報・テクスト〕が、具体的な状況とのこうし

た関連をぬきにして理解されるということ、解明されるということは、全くありえないことです。言葉の交換は、他の種類の交換と分かちがたく結び合っており、それらの交換の営為と共に基盤、つまり生産関係の中での交換という共通の基盤の上に成長してきたものです。言葉（発話）を、その永続し、生成発展する統一された交換過程から切り離すことは、もちろん、不可能なことです。…言語が生き、歴史的に生成しつつあるのは、まさに今ここでのこの具体的な言語コミュニケーションの中でです。言語学が作りあげた言語形態の抽象的な体系の中でもなければ、語り手の個人的な心理の中でもありません。（バフチン、1980, pp.210-211）

そのように指摘した上でバフチンは、言語の実際の生成過程と対比しつつ言語研究の手順について以下のようにさらりと3項に分けて箇条書きで説明している。

- ① 言語コミュニケーションの形態と類型とを、その具体的な諸条件と関連させながら、解明する。
- ② 個々の発話・個々の言語運用を、それが構成要素となっている言語コミュニケーションと関連させつつ説明する。つまり、言語コミュニケーションによって規定されている、日常生活とイデオロギー活動との間で発せられる発話のジャンルを解明する。
- ③ 以上の成果をふまえて、言語学がふつう、言語形態を扱う扱い方を再検討する。

（バフチン、1980, p.211）

そうした後にバフチンは次のような議論を付け加えている。

このように考えるなら、ひとつの纏まった全体としての発話形態に関する問題がきわめて重要なという帰結が出てきます。すでに述べたとおり、

今日の言語学は、発話そのものに近づきうる方法を失っており、発話を構成する要素〔文およびそれ以下の単位〕をこえて、さらにより大きな単位にまで分析を及ぼすことがありません。しかし実際には、言語活動の流れを構成する現実の単位になっているのは発話です（北岡訳ではこの一文抜け、筆者注）。〔発話という〕この実在する単位の形態を究明するには、それを発話の歴史の中での流れから切り離してしまうことは許されません。ひとつの纏まった全体としては、発話は言語コミュニケーションの流れの中でのみ、実現されるものです。（バフチン、1980, p.212）

ここでバフチンは言語研究の対象及び研究の単位として「一つの纏まった全体としての発話形態」を挙げているわけであるが、ここでも執拗に発話形態を発話の歴史の中での流れから切り離すことを拒絶し、発話が言語的交通の流れの中でのみ実現されるという事実を強調しているのである。バフチンは、言語研究という言語あるいは発話を対象として行われる学問的営みに対して強い警戒心を持っているようである。そして、実際のところ、バフチンは言語研究のためのプログラムを簡潔に提示はしているが、バフチン自身は言語研究そのものには取り組んでいないのである。

3 新たな記号の学あるいは言語の学へ

バフチンは、文学、芸術、宗教、道徳、学問、政治などの文化的な現象を単にイデオロギーあるいはイデオロギー体系と呼び、こうしたイデオロギーと日常生活での経験及びそれと直接に結びついた外的表現との総合である日常イデオロギー（バフチン、1980, p.199）を区別している。そして、バフチンの主要な関心は、前者のイデオロギーを研究することにある。

そのようなバフチンの関心はバフチン（1980）の第1部第1章でははっきりと示されているのであるが、同部第2章から第2部の最終章までの計6章では、バフチンの議論はどちらかというと日常イデオロギーのほうに傾き、またイデオロギー的交通よりもむ

しろ対面的な言語的交通のことを論じていると思われる部分が多いのである。バフチンにとってはイデオロギー的交通も日常イデオロギーの交通も社会的な記号現象であるわけで、バフチン（1980）においてもその他の著作においても、その生成の構造や実践の過程などを議論する際には両者を区別せずに論じている。そして、バフチン（1980）の第1部第2章以降の大部分でもやはり両者を段々に区別することなく議論しているのである。そのような事情から、バフチン（1980）の第1部第2章以降は、所々でイデオロギー的交通についての議論を挟み込んでいるものの、主として対面的な言語的交通における言語について議論しているように見えるのである。

バフチンの本来の趣旨からすると、バフチン（1980）はイデオロギーの学のための記号の学（あるいは言語の学）として読まれるべきものである。しかしながら、バフチン（1980）の第1部と第2部を見ると、イデオロギーの学のためのという本来の焦点が希薄になっている。それゆえ、バフチン（1980）の同部は、純粹に新たな言語的交通（一般の用語では言語コミュニケーション）と言語の学として読むことができるのである。

注

1. バフチン（1980）からの引用中の〔 〕は、訳者（北岡）が邦訳するにあたり、原著の意味を尽くすように補ったものである。
2. バフチン（1930/2002）では、日常イデオロギーをさらに最下層の最もうつろいやすい層から最上層のイデオロギー活動と直接接する層までの連続体として捉える見解を出している。
3. バフチンの『マルクス主義と言語哲学』には、本稿で参照している北岡訳（バフチン、1980）と桑野訳（バフチン、1989）がある。アレクセイ・パルキン氏（元大阪大学客員研究員、専門は言語心理学）の協力を得て、ロシア語原典と2つの邦訳を比較対照したところ、北岡訳のほうが原典の趣旨をよく反映していると判断されたので、本稿では北岡訳を参照している。

4. “*obschenie*”とほぼ並んでバフチンは“*vzaimodeistvie*”という語も頻繁に使用している。この語も、前者とよく似ていて、「みんなでいっしょに行動する」というような意味で、バフ（1980）では“*obschenie*”とは区別して「相互作用」あるいは「相互行為」と訳されている。
 5. Holquistは、括弧付きで「バフチンの哲学」という呼び方をしている。
 6. そのようなバフチンの知識理論あるいは認識論は、Berger and Luckmann（1966）が展開している知識論あるいは知識社会学とひじょうに親近性がある。かれらの論は、「社会は人間の産物である。社会は客観的現実である。人間は社会の産物である」という人間学的必然性（anthropological necessity）を剔出して、人間の世界経験の相に迫ることに成功していると評価されている。そして、かれらの理論構築の中でも言語が重要な要素として採り上げられているのである。
 7. マルクスの上部構造と下部構造の関係を理解するためには、廣松（1990）のpp.22-56が参考になる。廣松も引用しているように、社会の経済的組織つまり下部構造については、マルクスが『経済学批判』の序文の中で、「生活（ドイツ語ではLeben、筆者注）の社会的生産」という言い方をしていることにも注目すべきである。以下、該当部の引用である。
- 人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、彼らの社会的存在

- が彼らの意識を規定するのである。(マルクス『経済学批判』(大内・細川訳) p.6)
8. バフチンはさまざまな記号の中でも言葉という記号の特性について以下の5つの点を挙げている。
- (1) 記号としての純粹性
 - (2) イデオロギー的中立性
 - (3) 日常コミュニケーションへの関与
 - (4) 内的発話となること
 - (5) あらゆる文化現象に伴うこと
- (バフチン, 1980, pp.23-28)
9. Linell (2009) はこうした見方をより具体化して“inter-act”(間-行為)という概念を提示している。

参考文献

- Berger, P. L. and Luckmann, T. (1967) *The Social Construction of Reality: Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Anchor Books. 山口節郎訳 (2003) 『現実の社会的構成』新曜社
- Clark, K. and Holquist, M. (1984) *Mikhail Bakhtin*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 川端香男里・鈴木晶訳 (1990) 『ミハイール・バフチーンの世界』せりか書房
- ミハイール・バフチーン、北岡誠司訳 (1929/1980) 『言語と文化の記号論』新時代社
- ミハイール・バフチーン、桑野隆訳 (1929/1989) 『マルクス主義と言語哲学』未来社
- ミハイール・バフチーン、小林潔訳 (1930/2002) 「芸術のことばの文体論」『バフチーン言語論入門』桑野隆・小林潔編訳 せりか書房
- 廣松涉 (1990) 『今こそマルクスを読み返す』講談社現代新書
- Holquist, M. (1990) *Dialogism*. London: Routledge. 伊藤誓訳 (1994) 『ダイアローグの思想』法政大学出版局
- Linell, P. (2009) *Rethinking Language, Mind, and World Dialogically*. Charlotte, NC: Information Age Publishing.
- カール・マルクス、大内兵衛・細川嘉六監訳 (1964) 『経済学批判』Marx-Lenin主義研究所編、大内兵衛・細川嘉六監訳 (1964) 『マルクス=エンゲルス全集 第13巻』大月書店
- ゾシュール, F.、小林英夫訳 (1916/1972) 『一般言語学講義』岩波書店
- Vološinov, V. N. (1929/1973) *Marxism and the Philosophy of Language*. Matejka, L. and Titunik, R. (trans.). Cambridge, Mass.: Harvard University Press.